



# 家族を頼れない 子どもたちの声を聞く



施設で生活する子どもたち支援実践交流集会  
兵庫教育文化研究所・兵庫県教職員組合



畠山  
麗衣さん

これまで保護や措置など様々な場面で話を聞いてもらえない経験をしてきた子どもたちにとつては、伝えたいことや感情がわからず、自分の気持ちを言語化することが難しい。そこで、日常の関わりでの意見形成支援がすごく重要なことだ。

意見表明をするには、子どもたちが考えるために必要な情報があり、わからないうことがあれば聞いても上にしつかり考えてもらう。その上で意見表明をしたら受け止めてくれる、聞いてもらえるといった経験を何

度も繰り返して、やっと本当のことと言えるようになる。そこには、自分のことを知ってくれている、見守つてくれている人が必要である。

また地域、社会の中で支え合って子どもを養育しているこう、育てていこうといつた視点がすごく重要である。「家族を頼れない子ども」がかわいそうだから支援しなければならないという視点であれば、きっとそのおとなには子どもたちは近寄つていかない。

学校という場は、唯一子どもたちが日中の大半を過ごしている場所である。子どもたちにとって、安心できるおとなに大切にしてもらえる、声を聞いてもらえるというような安心できる空間の中で、こうなりたい、こうありたいということを積み重ねていけるような場であつてほしいと思う。



柏木  
智子さん

多様な状態にある子どもたちへの支援を考える上で、多職種・多機関・地域の方々と教職員がつながり、子どもの頼れる先、つまり声を出せる先をたくさんつくること、また、教職員、あるいはクラスが頼れる先になる、声を出せる場になることがとても重要である。

そして授業の中でその場をどうつくっていくのかも大切である。そのための一つの方法としてICTの一人一台端末の活用もとても有効である。例えば、書くことや話すことが難しい子

どもにとつて、端末に打ち込めば自分の思いや考えが文字になつたり、端末にむかつて話せば、それが文章として表記されたりすることとは、自分の内なる声を出せる一つの有効な手段である。特に外国にルーツのある子どもは、端末を使用して翻訳することができるので声を出しやすくなり、恥をかかなくてすむ。

また、国語など様々な科目でデジタル付箋紙を使うと、色で自分の声を表すこともできる。そして、教員が「話し合う中で、色が変わつてもいいよ」と言うと、画面上で友だちの意見が移り変わっていく様子を見ることができる。そうすると、確固とした思いや考へでなくとも、表現していいんだ、中途半端な思考や弱い意思でも出してもいいんだと思えるようになる。また、様々な意見が移り変わる様子を

端末の一斉表示機能を通して見ることができると、様でいいことを視覚的にかりやすく理解することができるようになる。加えて多様性とは、人と人の間あるだけではなく、一人人間の中にもあり、その自身も多様だということわかるようになると、子どもたちは他者を固定的にすることをしなくなる。そこで、子どもの固定観念による偏見が薄れていく。すると、「今はどう考えるの?」、「本当にそれでいいの?」と聞き合いができる。そう問われるさらに子どもどうして声を出せるようになり、声をきき合うことができるようになる。このように、おとが声を聞くだけではなく、子どもどうしで声を出せようになることが重要なようになることがある。

災害救援カンパに能登半島地震

能登半島地震

# **2023年度 施設で生活する子どもたち支援 実践交流集会**



伊藤嘉余子さん

「子どもの声を聞く」というのは、子どもの声をどう具体的に実現していくのか、子どもに関係することに対して、実際に子どもの意見や声を反映させることができることである。子どもの声を反映、実

A black and white portrait of actress Ito Kae. She is wearing a dark blazer over a white blouse with a bow tie. She is holding a microphone close to her mouth, suggesting she is speaking or singing. The background is plain and light-colored.

12月3日にラッセホールで、「家族を頼れない子どもたちの声を聞く」をテーマに、「施設で生活する子どもたち支援実践交流集会」が開催され、約90人が参加した。今年度は二部構成でおこなわれ、第一部では、伊藤嘉余子さん（大阪公立大学）による「『こども元年』における社会的養護の子どもの支援を考える」と題して講演がおこなわれた。続く第二部では、柏木智子さん（立命館大学）をファシリテーターに、足立憲亮さん（朝来市教組）、鈴木まやさん（尼崎市立社会福祉事業団）、遠藤行博さん（中央地区里親会）、畠山麗衣さん（NPO法人Givin' Tree）をパネリストにパネルディスカッションがおこなわれた。（以下、各報告者の発言『要旨』を掲載）

受け入れてもらうことで子どもの権利を擁護するといつた3つのレベルで意見表明権を考えていく必要がある。

というのを、親が子どもを中心と考えることができない子どもたちである。だから、親の代わりに私たち社会全体が、社会的養護の子どもたちを守らねばならないと我也思ふ。

たことがあつたら教職員間やSC、SSWrと情報共有していくことが大切である。

くことが増え、お互に  
談もしやすくなる。

相  
ことそのものを尊重すると  
いうことを忘れないこと、  
そして、どうして今この子  
はこういうことを語ろうと  
思つたのか、そこに至つた  
心情を想像し、その心情を

遠藤  
行博さん